

回胴倒錯者

— PACHISLO FREAK —

逃走車両

その2人組みは、依然その場で立ち話をし、動こうとはしない。(話がしたいなら車に乗って話をすればいいのに...)内心そんなことを考えながらじつとその2人組を監視していた。ザザザ...耳に入るととても嫌な音、それはインカムの音である。誰かが何かを発言しようとする前に入る雑音だ。(頼むから私を呼ぶのは止めてくれ!)心でそう願っている、それは死語でいうところのマーフイーの法則、「副主任すいません、〇〇なのですがどうしたらいいですか?」

「今忙しい、なんとかしろ」
「.....」
お客様を最優先という信条に反し、こつちの興味を取ってしまった自分がいた。いやいや、犯人を追及することも、結果としてお客様のためである。そう前向きに判断し、監視を続けていた。ザザザ...

「あの、すいません副主任、どうしていいか...」
「班長連中!お前らは何をやってるんや!」

「あつ、はい!しかし、副主任...」
とりあえず怒鳴ってみるも、心の中では(すまん、みんな。もう少しだけ待ってくれ!)そうつぶやいていた。さすがに従業員たちも限界か、と思われた矢先、とうとうその瞬間がやってきた。彼らが車に乗り込んだのである!

その車は私が全く予想していなかった車だった。黒塗りのピカピカの車輛、天井には何かが載っている。そう、それはタクシーである。全く予想外な展開で呆然としている私を尻目に、その車輛は駅方面に向けて走り去っていった。(そういうことか、やはり犯人は店長だ!)そう心の中でつぶやき、慌ただししホールへ急行したのである。

犯人

ホール内のごたごたの処理をして、事務所へ戻ると、間もなくして店長が出動してきた。妙に上機嫌である。一言二言の会話を交わした後、店長の携帯に着信が入った。いつもの高笑いを多量に使用した迷惑な会話である。どうやら久しぶりの友人との会話らしくあった。その延々と繰り返される高笑いがうとうとして、私は事務所を出てホールを巡回していた。

間もなくして、インカムに店長の声が入る。「おいA、ちよつと事務所」足早に事務所に向かう。私の顔を見るや否や「地元の友達が来てるから、ちよつと会いに行ってくるわ。あとの事は頼んだぞ」こう話しかけてきた。例の2人組みのことだなと思いつながら、ただ「わかりました」とだけ返事をおいた。

店長が出たあつと、パソコンにデータ入力しようとしてパソコン前に着席する。本日の設定状況の入力などである。いつも設定表が入っている秘密の

引き出しを開ける。そしてそれを取り出し、一通り目を通す。ん?これは、明日の設定予定表だ。いつもなら次の日の設定は閉店ギリギリ、もしくは閉店後にしか決めない店長なのに、今日に限ってすでに明日の設定が決まっている。もしかして...、という疑惑が先行し、その設定表を隅々までチェックする。そこには怪しげな66の並びがあった。もう一つ6が並んでいればそれは悪魔的なもの。悪魔になりかけのその並びは、今日に引き続き、明日の予定にも組み込まれていた。それが偶然の産物ではないことはもはや疑う余地もない。明日の朝、必ずヤツらが現れる。1度だけならまだしも、2度・3度になるとただの出来心ではすまない。それは6の並びに侵されたただの悪魔である。

いきなり開いたドアにビクッとしてしまう。店長の意外に早い帰社である。見るからに上機嫌。
「お早いお帰りです。」
「ちよつと会ってお茶したただけだからね。」
「そうですか。あと今日は設定を決めるのがやけに早いですね。」
「友達と会う予定だったから、もしかして遅くなるんじゃないかと思ってね。あと、何故か財布の中身がこんなに少ったよ。ひやはは!」

その私に見せびらかせた財布の中身は、論吉さんが顔を多数並べていた。この人はいったい何者?なぜこんなに分かりやすいの?その犯人が誰なのか、

サクラ

もはや誰にでも分かる状況だが、逆になぜこんなに堂々と、自分が犯人だといえるのか、それが私には全く理解できなかった。

ここでのサクラ、それは一般的に使う桜ではなく、隠語として使うサクラである。サクラが咲くと人が集まるから、とか、パッと咲いてにぎやかにし、パッと散ってどこかへ行ってしまいうから、とかの語源や意味合いがあるらしい。

A氏プロフィール

三重県出身。三重の高校を卒業後、進学のため大阪へ。学業よりもパチスロに専念してしまいお決まりコースの大学中退。中退後3年間はパチスロで生計を立てる。その後サラリーマンになるも副収入はパチスロで。結婚のため三重に戻りホール店員となる。現在は知識と経験を生かし某店で設定師として手腕を振るっている。目押しレベルはスイカの種まで直視できるほどの異常っぷり。

台並んだ唯一の箇所だった。それが偶然だという確率は限りなくゼロに近い。また、それがほぼゼロであるから、私や他の従業員だけでなく、お客さん達からみても容易にその「異常」に気づくことができた。
ホールを巡回すると案の定、多数の常連が入れ替わり立ち代りで話しかけてくる。「あの2人おかしくない?」「とうとうサクラを雇ったん?」「俺にも設定教えてくれへん?」など、その質問は100%それについてのものだった。嘘は苦手なタイプなので、ついついお客さんに賛同してしまう。「確かにおかしいですね...こちらでも原因を追究していますので、判明しだい対策と防止に努めます」はつきり「偶然でしょう」などと言うことはできなかったのである。

心の中のもやもやはお客さんに話しかけられるたびに増大していった。設定6にしても出ないときだって頻繁にある。しかしその2人組みは設定6以上の成果を上げている。昨日の閉店後、明日は出ないでくれよと願いながら打ち込んだ設定、その思いは届かなかったようだ。店長が決めた設定ではあるが、自分が打ち込んだ設定でもある。自分には責任などないのに、何故かそれに潰されそうになる。明日もこれが続くなら...、私はいったいどういう対処をすればいいのだろうか?今日も設定を打ち込むのは私である。

変革の期待と失望

日本では政権交代が行われ、今、政治はガラリと変わろうとしている。しかし世間では民主党に期待しているという人は存外に少ない。民主党がいいからという理由ではなく、自民党がダメだからというものが多数を占めるからだ。寂しい理由である。

パチンコ・スロット業界はどう変革されていくのだろうか?政権交代も業界の変革になんらかの関与がある気もあるが、はたしてどうだろうか。この場では深い言及は避けておこう。

今まで多くの変化が見られたこの業界。その機種その機種の性能の変化だけでなく、営業形態もガラリと変わってきた。それは技術の発展や人の意識の変化がその要因となっていることも多い。昔はイベントなどなく、ほとんどが通常営業。しかし今は毎日イベント。正直、それが正しいとは思えない。飽和状態にまで膨れ上がったイベント量。結局はその中でも強いとされるイベントに人は集まる。他店よりもっと強いイベントを、他店よりもっと魅力的なイベントを...。ホール同士が新たなイベントで競り合う。少し前の強いイベントには既に力なく、一般的なイベントに成り下がる。これが繰り返され、今以上のイベントは存在しない。それ以上はホールの死を意味するからだ。それ以上を望んだ結果、ホールは嘘をつかないといけない状況に追い込まれる。だまされた

ユーザーは、イベント自体を信じないようになる。そのイベントは意味をなくすどころか、通常営業にも劣る結果となるのが明らかだ。なんのイベントもなかった時代、お客の入りはいつも同じ。しかし、出す出さないはその日によって違う。なんの告知もないので、出ようが出まいが、ある意味ホールは裏切っていない。お客も裏切られたとは思わない。そうはいっても今の時代はイベントが必要不可欠。なんのなんの言いながらもイベントに頼ってしまう。心のどこかで疑いながらも、それを信じようとする。ホール側も裏切るまいと思いつつも、経営上裏切らざるをえないときもある。そして信頼は薄れていく。これはこの業界が作ってしまった負の遺産である。疑う行為も騙す行為もどちらも悲しい行為。

これは先に述べた民主党への期待感のなさと同じ状況を物語っているように感じる。即ち、社会自体がそのようになりつつあるのである。昔はなかった携帯電話。待ち合わせの約束をする、その時間、その場所へ必ず行かなければならない。しかし今は違う。少し寝坊したから、用事ができたから、電話一本でその約束は崩壊する。それを聞いたほうも無駄に待ちぼうけを食らわずに済んだと勘違いをする。私はこれが正解だとは思いたくない。これに馴れてしまった両者に対し、私は空虚さだけが残るのである。